

ノルブリンカの花

密 祐文

ここダブチ刑務所からは空しかみえない
空を流れる雲たち

それが父や母だったらどんなに素敵だろう

監獄の友だちよ

わたしたちはノルブリンカの花

どんな霜や霜だろうが

わたしたちのつないだ手を

離れさせることはできない

いつか必ず雲の後ろから太陽があらわれる

だからそんなに悲しまないで

たとえ太陽が沈んでしまっても

こんどは月が照らしてくれる

だからそんなに悲しまないで

この歌は、チベット独立のデモに参加し逮捕された尼僧が監獄で歌ったものである。監獄の辛さを伝えチベットが独立する日を夢見る歌である。彼女たちはその歌を看守に聞こえるように敢えて歌った。すぐに、監房から引きずり出されるとロープできつく縛られ、激しい拷問を受けた。その拷問を受け続ける彼女たちの中にシェーラブ・ガワンというまだ一七歳の少女がいた。少女の小さな体も、拷問によりぼろぼろになり顔は腫れ上がっていた。その後、少女の言動がおかしくなった。何でもすぐ忘れるようになり記憶も曖昧になり、変なことを口走ったりするようになった。いつも背中や腎臓、胸の痛みを訴えていた。食欲も落ち、最後には何も喉を通らなくなった。刑務所側は少女の容態の悪さを知りながら無視をしていた。少女の容態は好転せず二ヵ月後、息を引き取った。体中の痛みに苦しんだ末のことだった。まだ一七才というのに、苦しみながら死なねばならないなんて。シェーラブ・ガワンを鳥葬した人はこう言った。「こんなにひどい状態の若い死体は今まで見たことがない。腎臓も肺もボロぞう

きんのようだったよ」と。チベットに咲くノルブリンカの一輪の花が消えた。

ノルブリンカとは、彼女たちの生き神であるダライ・ラマ法王の住む場所であり「宝の庭」を意味している。神の住む宝の庭に咲く花々こそが彼女たち尼僧である。彼女たちは「良心の囚人」と呼ばれる人々である。事実上、中国の圧政に置かれているチベットで祖国を思う気持ち、そして民族の最高指導者を思う気持ちを明らかにした故に逮捕され懲役を言い渡され連日、日本では想像もつかないような拷問を受け続けている。しかし、彼女たちが慕う最高指導者であるダライ・ラマ法王は皆にこう呼びかけ続ける。「一部の中国人たちがどんなに酷いことをしても中国人すべてを憎んではなりません。心に怒りをもつてはいけません」これは、生半可な性善説では決して口にできない信念である。チベット問題を解決するには非暴力、そして平和活動しかないというメッセージは確実に彼女たちに届いている。なぜなら、現在も拷問により後遺症に苦しみながらも目の前で仲間が、肉親が息絶えるのを見ながらも決して希望を捨てない。言語に言い尽くせない残酷行為を浴び続けながらも彼女たちは、それに許して応える。許しと祈りを以て応えている。人はどこまで優しく、どこまで気高くなれるのだろうか。「人間という種への絶望」が常識のようになっていた文明社会に生きる私にとって、彼女たちの生き様は衝撃的だった。衝撃さえ伴う感動である。人間という種への希望が、そこに宿っているように思えた。決して息絶えない希望が彼女たちを支えている。自分の国で言いたいことも言えず、願いも届かず基本的人権のかけらもない状況で投獄されながらも、希望を捨てないのがノルブリンカの花である。チベットの絆の花である。

その花が、いつの日か綺麗に自由に咲く姿を心から見たい。いつまでもノルブリンカの花であれ。